

# 弥生土器から土師器にみる絵画土器について

柴垣 勇夫

## 1. はじめに

原始人が何らかの意図をもって、土器の表面に、焼成前の、粘土がまだ柔らかい段階に絵画らしい文様を刻み込んだのは、縄文時代中期に始まる。<sup>(注1)</sup>縄文中期土器や、縄文後、晩期の土器に絵画のある例が北日本に知られる。しかし、本格的な線刻画が登場するのは、弥生時代中期以後である。

全国各地で出土している絵画土器については、1988年秋の当館と五島美術館共催による『日本陶磁絵巻』と題した特別展において展覧された。その中で、原始絵画土器について全国的な分布の特徴をその図録解説として述べたが、<sup>(注2)</sup>絵画の内容別にこれを検討して、さらに地域的な特徴をみちびき出そうとするのが、本稿の趣旨である。

すでに古く、唐古遺跡出土の絵画土器の検討から、弥生時代の絵画土器は畿内第4様式とその直後の時代という限られた時代に、銅鐸絵画に比べ稚拙ではあるが典型的でなく、自由自在な省略と誇張に基づく自由な線の動きで表現されているとされた小林行雄氏の指摘にある如く、その中心は何といっても、大和・唐古遺跡（現在は唐古・鍵遺跡という名称で、<sup>(注3)</sup>より広い範囲の集落としてとらえられている。）であるが、1955年当時以後の多くの発掘例は、なお他地域にも絵画土器が存在したことを明らかにしてきた。

こうして、1980、1981年にかけて、佐原真氏を中心に資料集積が考古学雑誌に掲載され、<sup>(注4)</sup>全国の弥生絵画土器が広く知られるようになった。氏は、そのまとめの中で、

畿内第3様式以後、第4様式にかけては絵画が、第5様式には記号土器が盛行し、具象から抽象的表現へ、土器に描かれた絵画は変化を遂げるとされ、呪力・物語・思想を伝える媒介として弥生時代の絵画・記号土器は畿内地方を中心に生まれ、<sup>(注5)</sup>発達したと述べられている。

今、これを描かれた対象別に分類し、その分布を探り、その特徴的なものを眺めてみることにしよう。

## 2. 弥生時代中期前葉の絵画土器

### (1) 大阪市森小路遺跡出土の壺形土器（人物）

弥生時代における初期の絵画は、中期に始まると考えられており、その初現は、流水文銅鐸の鱗部分から身にかけて鋳出された陽刻状の人物像とみられる。もともと絵画を描く風習をもたない弥生時代人が、まず人物を描くことを始めたのは、おそらく銅鐸鋳造という新技術を体得するのに、中国大陸との深い文化交流があったと思われ、その過程で、大陸でのやゝ記号的な表現によって人物なり、動物なりが描かれたことを知ったことによると推定される。

これまで、兵庫県太子町川島川床遺跡出土の畿内第3様式（中期中葉）の壺形土器にみられる「鹿と家」の絵が弥生時代最古の絵画と考えられてきたが、昭和61年発表の森小路遺跡例は、<sup>(注6)</sup>第2様式にさかのぼって記号的な人物が描かれていたことを示すものとなった。しかし、報告されているように、土器焼成後の絵画であるという点で若干問題がなくもないが、廃棄の時代層位からみて、中期前半と考えられている。しかも、描写内容は、銅鐸絵画と比べても、古い様相といえるものである。なお、時期的に後出であるが愛知県清洲町朝日遺跡からも同様の描写の人物絵

画土器が出土している。

(注7)  
(2) 愛知県清洲町朝日遺跡(貝殻山貝塚地点)出土の土製品

(人面文)

弥生時代前期を主体とした貝殻山貝塚の第4地点貝塚上層出土の、円板状土製品の平坦面に櫛状具で人面をやゝ抽象的に描いているもので、直径4.2cm、厚さ4mm強の小形品である。円板状の上下に2孔ずつ穿孔されていて、垂飾品ないし、小形壺の蓋かと推定されるが、<sup>(注8)</sup> 絵画の描かれている様から、垂飾品と見るのが妥当であろう。

人面は、4本の櫛状具で、目、鼻、ひげ、口を表現しているが、最初に抽象的な曲線を円板全面に描き、その上へ顔の細部を、誇張して描いている。裏面は、曲線が抽象的に走るのみであるが、一部目らしき部分が描かれていて、途中で描くのを放棄したようにも受け取れる。

いずれにしても単線で描かれたものではない点に、絵画土器とすべきか疑問視されるものであるが、その後の東海西部の絵画土器の系譜を考えるうえで、見過すことのできないものであり、描かれている内容からみても、絵画土器とみてよいものと思う。

出土層位からは、この地方の朝日式土器と称される櫛目文土器が伴出しており、描くのに用いている櫛状具もまた、その時期の特徴を示していて、中期前半期のものとみてまちがいない。

以上の2点は、絵画土器として、弥生時代の初現期のものとみてよいものである。そのほか、北九州・佐賀県には、弥生前期の甕棺に、立木ないし工作物の如き、やゝ記号状の絵が描かれたもの(『日本陶磁絵巻』図録No.146・東山田一本杉遺跡)が出土しているが、記号的な要素の強いものである。

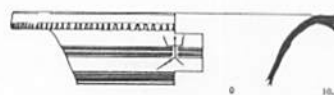


図1. 森小路遺跡出土人物絵画



写真1. 朝日遺跡出土人面文土製品

### 3. 弥生時代中期後葉～後期初頭の絵画土器

#### (1) 唐古遺跡ほかの多彩な絵画土器

大阪周辺の弥生中期初頭の土器に出発をみせる近畿地方の絵画土器が、最も多量に、かつ最も多くの題材をもって出現するのは、大和地方・唐古遺跡(唐古・鍵遺跡)を中心とした地域であった。

唐古遺跡出土のものに壺形土器の肩部全体に多彩な絵画を描いたものがある(『日本陶磁絵巻』図録No.66・掲載写真は破片状態だが、展示までに、肩部が一周して復元された=写真2)。鹿、家(高床式)、スッポン、人物(シャーマン)、不明動物が、肩を一巡するように描かれていて、鹿が各個体の間に配され、全部で6頭描かれている。こうした絵画には、豊穡の祈りが込められ、季節を応々にして表わすとされている。



写真2. 唐古遺跡出土絵画土器

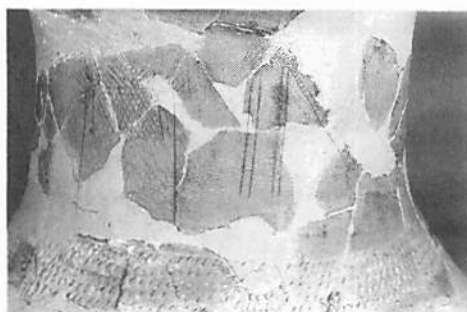


写真3. 鳥取県稲吉遺跡出土絵画土器

スッポンに代表される魚貝類の豊漁と、鹿に代表される狩猟の成功と、高床式倉庫に示す豊穰、それを願う呪力をもつ人物を描くことによって、弥生人の生活への祈りをこの大形の壺形土器に託しているとみられるのである。口縁と下胴部を欠き、しかも破砕されたような土器片として出土していることは、祭りの最後に破砕するという行為があったのかも知れない。頸部の貼付突帯や壺の形状から畿内第4様式、中期末の時期の土器である。

同様な豊穰を祈った祭りを描いたものと推定されるものに、鳥取県淀江町稲吉遺跡の土器がある。<sup>(注9)</sup> (『日本陶磁絵巻』図録(以後、図録と略す) No.107)。

中期末から後期初頭に位置づけられる大形の広口壺の口頸部には、太陽・人の乗った船・高床式建物・堅穴住居・樹木・鹿が描かれている。太陽は渦で表現し、船には櫂を数本配し、網をふり上げる人物も描いている。また、樹木には、罌をしかけた様子が見られ、その左に鹿らしき動物を2頭描いている。おそらく、船を用いた漁撈生活(あるいは航海か)の様子と、森の樹木を利用した狩猟と、さらに自分たちの生活の場としての倉庫や住居群を描き、集団の生活の安定を祈っているものとみられる。

先の唐古遺跡の絵画にもみられた高床式の建物は、おそらく穀物の収穫後の貯蔵庫であって、農耕生活の最も重要な位置を占める建物であったのであろうか、ほゞ土器絵画の中心部位を占めている。

こうした豊穰を祈って描かれた壺形土器はどのような場所で、どのように使われたかは明瞭でないが、呪術者(シャーマン)の描かれている点などから、祭りの場での使用があったものと考えられる。これらが、胴径70cmを越す大形の壺であり、しかも破片となっていることにある種の特別な意味があったものと思われる。

なお、同様な豊穰の祈りを表現している例として、唐古・鍵遺跡北方0.6kmの低地に位置する清水風遺跡(天理市庵治町)からの出土資料がある。両手を広げるシャーマン的な構図でしかも胴位をあらわす方形の中に動物を描く人物画<sup>(注10)</sup>や、家屋と鹿が組みあわさった図<sup>(注11)</sup>などが大形の壺形土器肩部に描かれていて、上述の2例と同様な構図をもつ弥生中期末の絵画土器が存在したことを推定させる。

## (2) 家・鹿・船などが単独に描かれた土器

先述の唐古・鍵遺跡や清水風遺跡、さらには大阪府下の瓜生堂遺跡・東奈良遺跡・四ツ池遺跡などで、単独と明瞭に推定できる土器(胴部位が一巡するところから)のほか、破片の様子からほゞ単独とみられるものを含め、多くの破片が出土していて、近畿のうち大阪(摂津・河内・和泉)、奈良(大和)に集中してこれら絵画の描かれた土器がみられる。破片の大きなものには、あるいは先述のグループのように物語的な構図の一部となるものがあるものと思われるが、現状では、単独の絵画ととらえざるを得ない土器片群である。これらにはどのような意味をもっていたのか推定の糸口すらおぼつかないが、考え得る内容は、やはり生活の安定を願う祈り、祭りといったところであろう。

この頃およびその前段階に製作、使用された銅鐸に、輪郭線を浮き彫りにした動物、家、人物、狩猟図、道具などの絵画がみられる。この絵画は、袈裟襷文によって区画された方形のキャンバス4~6面の表裏を利用して描かれた(鋳出された)ものが主であるが、その表現方法は、この時期の畿内地方出土の絵画土器とよく類似している。しかし、古くから指摘されているように、

土器作りが女性であることからくる刻線表現のやゝか細いこと、描く動物に、トンボ・水スマシなど季節を表わすものが銅鐸にはあるのに、土器にはないなどの違いが認められる。<sup>(注12)</sup>

### (3) 鹿の群れを描く土器

東大阪市の巨摩遺跡出土の中期末の壺形土器(図録No86)は、ほぼ完器に近い状態で出土したもので、胴部中位から上位にかけては一周するようにスタンプ状の道具で細かい鹿を陽刻で押印している珍しいものである。

同様に器を一周するように鹿を描いているものに、中期後葉に位置づけられる岡山市津島遺跡出土の高杯(図録No109)がある。高杯の脚部に、鹿一頭分と前足のみが描かれた破片であるが、鹿の描かれている様子からみて脚部を左廻りにしては一周するものと推定できるものである。

鹿を、狩猟の対象とする考えにたてば、この絵画は、収穫を願うことにつながるし、民俗例から、神の使者として鹿の群れをとらえる考えにたてば、集団の生活を庇護し、かつ生活の安定をこの土器の絵画に託したとみることのできるものである。<sup>(注13)</sup>

これら連続する鹿の群れ図は、その系譜を銅鐸にもとめることのできるものである。但し、時間的には、中期前半に位置づけられる流水文銅鐸にみられるものと類似し、時間的に絵画の方が後出である。<sup>(注14)</sup>

なお、線刻の鹿が上下に描かれ、中央を直線でかつ下段の鹿の胴部(あるいは猪?)がこれと重複するようにして一巡させたと思われる壺形土器片(図録No19)が愛知県清洲町朝日遺跡から出土している。弥生後期後半のものだが、近畿や瀬戸内で古くにみられた群れの動物表現を、東日本への窓口である朝日遺跡において、後出の土器表面ながら認められることは、興味深いことである。

また、鳥取県から島根県にかけて認められる鳥のスタンプ施文土器もあるいは、巨摩遺跡や津島遺跡の表現と同類のものであろう。北陸地方から山陰地方にかけての土器には絵画が比較的少ないが、内容的には、畿内大和にみられる絵画と共通する部分も多く、この地に畿内的な文化が比較的早く伝わっていることを示している。鳥取県倉吉市中峯遺跡出土の壺形土器片(図録No108)は、細片ではあるが、極めてリアルな鳥の陰刻スタンプであって、時間的な問題(本例は弥生後期)を別にすれば、銅鐸絵画に共通する表現と認めることのできるものである。

### (4) 人面付土器(土偶形容器、人物形土器を含む)

中期段階の東日本に特徴的なものとして人面付土器や土偶形容器がある。

人面付土器は、北は福島県から西は愛知県まで分布する、中期中葉から後葉代にかけての貼付け、ないし、陰刻による人間の顔の部分を口頸部に表現した壺形土器である。これらは、大形壺ないし細頸壺が大半で、土器胴部に条痕文を施したり縄文文様にさまざまな沈線文を加えた文様が付されている。

これとほぼ同じ分布を示すものに土偶形容器がある。脚のない筒状の容器で、外形は頭部、腕、胴部の表現された土偶を示している。人面付土器と土偶形容器の違いは、頸部以下の体部が表現されているかいないかの点と頭部の顔面が壺口頸部のわん曲にそって表現されているか顔面部分が粘土板貼付による浮き出たものとなっているかの点に集約される。なお、土偶から脱却しつつも頭部を表現した器形のもの的人物形土器とした。

縄文時代晩期に有髯土偶と呼ばれる顔面に八の字状の髯(ほおひげ)を表現したものがあり、男女の別のなくなった土偶が出現してくる。これから発展した胴内部の中空な容器が土偶形容器であるが、肩や腕が簡単に表現されている。顔には2~3条のわん曲線が沈線で描かれ、髯を表

表1. 土偶形容器、人面付土器、人面文土器出土遺跡地名表

No	内容別	時期	大きさ	出土地	土器の状況	土器の形状	耳孔の有無	文献
1	土偶形容器	縄文晩期	高26.7 <sup>cm</sup>	神奈川県大井町中屋敷遺跡	完器	袋状容器	有	下欄注5
2	"	弥生中期	" 18.2	福島県高郷村上野尻遺跡	"	"	無	" 4
3	"	"	" 11.0	茨城県下館市女方遺跡	頭部片	"	有	" 2
4	"	"	" 10.0	埼玉県熊谷市池上遺跡	"	"	"	"
5	"	"	" 14.5	長野県松川町玄与原遺跡	"	"	"	" 3
6	"	"	" 36.7	" 丸子町腰越遺跡	ほぼ完器	"	"	" 4
7	"	"	" 16.4	愛知県安城市古井遺跡	胴以下欠	"	"	" 5
8	(頸部以下)	"	" 45.3	新潟県新発田市村尻遺跡	ほぼ完器 両手欠	"	無	"
9	人物形土器	"	" 18.0	千葉県市原市三島台遺跡	完器	細頸壺形	有	" 7
10	"	"	" 22.0	熊本県益城町秋永遺跡	一部欠	"	?	"
11	"	弥生後期	" 37.0	群馬県渋川市有馬遺跡	"	"	有	" 7
12	人面付土器	弥生中期	" 25.3	福島県表郷村滝ノ森遺跡	完器	"	無	" 6.8
13	"	"	" 42.8	茨城県那珂町海後遺跡	"	大形壺	有	" 3.4
14	"	"	" 43.5	" 大宮町小野天神前遺跡	"	"	"	" 6
15	"	"	" 69.5	" 下館市女方遺跡	ほぼ完器	"	"	" 1.3.4
16	"	"	" 18.5	栃木県宇都宮市野沢遺跡	口頸部片	壺	(?)剥離	" 1.2.4
17	"	"	" 23.0	" 佐野市出流原遺跡	完器	細頸壺 (顔面か注ぎ口)	有	" 9
18	"(片)	"	" 13.1	神奈川県横須賀市ひる畑遺跡	人面片	壺(?)	"	" 4
19	"(〃)	"	" 12.0	福井県福井市糞置遺跡	"	細頸壺	"	" 3
20	"(〃)	"	" 6.5	名古屋市南区市場遺跡	"	"	"	" 8
21	"(〃)	"	" 5.0	愛知県春日井市勝川遺跡	"	"	?	" 8
22	"(〃)	"	" 12.0	京都府長岡京市森本遺跡	"	壺(?)	?	" 2
23	"	弥生後期	" 15.0	山口県熊毛町天王遺跡	ほぼ完器	皮袋形注口壺	無	" 1
24	人面文土器	"	" 26.3	愛知県安城市亀塚遺跡	"	壺形	"	" 8
25	"	"	径 3.1	" 上条遺跡	完器	球状土製品	"	" 8
26	"	"	2片	愛知県清洲町朝日遺跡	胴部片	壺	"	" 8
27	"	古墳前期	高15.0	" 廻間遺跡	"	"	"	" 8
28	"	弥生後期	" 4.9	大阪府豊中市新免遺跡	頭部片	土製品	有	" 7
29	"	"	" 6.3	岡山県岡山市百間川兼基遺跡	完器	こけし形 土製品	"	" 7
30	"	"	" 6.0	" 総社市一倉遺跡	胴部片	壺(?)	無	" 8
31	"	"	" 6.0	" 岡山市鹿田遺跡	杯部片	高杯	"	" 8

(掲載文献)(各報告書は省略した)

注1. 坪井清足『陶磁大系』2 弥生 平凡社 1973

注2. 佐原真編『古代史発掘』4 稲作の始まり 講談社 1975

注3. 田辺昭三編『日本原始美術大系』2 弥生土器・須恵器 講談社 1978

注4. 工楽善通『日本の原始美術』3 弥生土器 講談社 1979

注5. 水野正好『日本の原始美術』5 土偶 講談社 1979

注6. 坪井清足編『世界陶磁全集』1 日本原始 小学館 1979

注7. 『特別展 弥生人の四季』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986

注8. 『特別展 日本陶磁絵巻一やきものに刻まれた絵画一』愛知県陶磁資料館 五島美術館 1988

注9. 『特別展 日本の考古遺物』東京国立博物館 1978

現しているが、目のまわりにも囲む線が描かれていて、入れ墨ないし身体彩色が施されていることを示している。

この表現がそのまま壺の口頸部に粘土帯と刻線で採用されたのが人面付土器である。土偶形も人面付も耳に小孔があり、何か装飾を施すようになっている。共に葬送にからむ土器であるが、まだ蔵骨器と断定されるまでには至っておらず、副葬用のうつわと解釈されている。

その分布は、土偶形容器が信越地方に広がる特徴をもつほかは、ともにほゞ東日本に重複して認められるところから、弥生中期の東日本における縄文的葬送の風習が引続き行われていたことを示すものと考えられ、土偶形容器から人面付土器へ変遷をたどったものと思われる。また、東海西部ではそうした風習をもたない弥生人との文化接触の中で、先にみたような、朝日遺跡における人面文土製品が生まれたものとみられる。

表1に土偶形容器と人面付土器の地名表を掲げたが、その後半に後期に出現する人面文土器を付加した。後述のように、瀬戸内と東海地方にこの人面文土器は分布するが、西日本からの絵画描写の影響下に、それまでの土器に人面を付す風習が合流して生まれたもので、伊勢湾、三河湾周辺がその分布の中心にあると思われる。

#### 4. 弥生時代後期の絵画土器

##### (1) 畿内を中心に分布する竜の絵

近畿地方では、後期に入ると、鹿や船、家などの具象的な絵画はなくなり、記号的なものが土器の表面に付されるにとどまるようになる。そうした中で、大阪湾周辺の遺跡を中心に、奈良や岡山での発見例も知られるようになった竜の絵の描かれた壺や器台形土器がある。

大阪府和泉市池上遺跡出土の壺形土器胴部に描かれた竜は、躍動する姿を描き出しているが、この図柄については、漢式鏡の鏡背に描かれた四獣文なり、獣形文その他の構図をとり入れたものと考えられている。竜そのものが想像の動物である以上、かなり抽象的な表現がとられているが、中国鏡からの模倣を行っている点で、四足獣をうまく描いていて優れた表現感覚を示しているといつてよい。

岡山市天瀬遺跡出土の大型の器台形土器に描かれた竜は、畿内出土のものに比べ、表現が稚拙で、さらに抽象化されているが、獣足らしき表現と、曲線の胴部から竜と判断されるものである。その表現の比較から、畿内にみられる竜の構図を模倣して描いていると推定される。この遺跡は、他にも特殊な土器や占骨が出土していて、祭祀性の強い遺構であったものとみられ、航海や豊漁など、神への祈りに使用されたと考えられている。

北九州から近畿にかけて、弥生後期には、土器への線刻が記号的なものになっていく中で、こうした竜の如き想像の動物が描かれるのは、単なる豊穰や生活の安定への祈りからの絵画土器ではなく、むしろ、国家への胎動期の一時的な現象として航海の安全ないし集団の守護を願って神への祈りを表現したものとみるべきものかと思われる。

##### (2) 人面文土器

先にみたように中期段階に東日本を中心にみられた土偶形容器や人面付土器にかわって後期前半から後葉、さらには、古墳時代前期にかけて、東海地方を中心に線刻された人面、すなわち、人面文土器がみられる。



著名な愛知県安城市亀塚遺跡出土の壺形土器胴部に刻まれた人面は、顔面を胴部中央に描いたもので、入れ墨と思われる曲線が眼の上部からほおにかけて刻まれている。口のまわりには、ひげが同じく条線で描かれている。弥生後期後半の土器に線刻されたもので、これに類似した文様が安城市上条遺跡出土の球状土製品や、清洲町朝日遺跡の壺形土器に認められる。愛知県内の出土例のほか、岡山県総社市一倉遺跡の壺形土器や、岡山市鹿田遺跡の高杯形土器の坏部裏面に細く線刻されたものがあり、いずれも後期後半代のもつとされる。愛知県では、そのほか、古式土師器の段階とされる壺形土器<sup>(注15)</sup>に、眼と入れ墨らしい曲線が認められるものが清洲町廻間遺跡<sup>(注16)</sup>から出土していて、尾張・三河の地域と、岡山の両地区に古墳時代初めにかけて分布していることが知られる。

ところで、愛知県での出土例には、口ひげの表現があり、中期にみられた人面付土器の系譜が伺える。おそらく、眼のふちの彩色ないし入れ墨とはおひげ、口ひげが中期段階に隆起帯や線刻で表現されていたものが、線刻のみにかわったものと思われ、耳にあげられていた孔も具体的に耳飾りを描いていて、人面付土器の耳孔の使用方法を暗示している。しかし、岡山県下の人面文は、口ひげの表現や耳飾りがなく、東海地方のものとする若干の表現の違いがある。身体彩色ないし入れ墨の表現に類似点があり、双方になんらかのつながりがあると思われるが、細部の違いをみると、中期段階からの連続的な系譜がたどられる東海地方にこうした人面文の誕生があり、瀬戸内方面へ広がったものと考えられる。この関係は、やがて、岡山方面の弧帯文土器（器台や壺形土器などに付された直弧文系文様）と類似の、かなりくずれた弧帯文が付された壺形土器が東海地方に後期後半から古墳時代前期にかけて認められることとつながりがあるものと思われる。愛知・三重・静岡の地域に、弥生後期後半から、古墳時代前期にかけてみられる弧帯文の文様は、規則的な構成は認められないが、ある単位の繰り返しがあるようで、名古屋市旧紫川遺跡出土の壺形土器<sup>(注17)</sup>には、二重線の弧文と、同じく二重線の交錯文が作り出す抽象的な文様を三反転の連続文様としているものである。あるいは人面文の抽象化されたものなのかも知れない。

## 5. 絵画土器の意味

以上、各時期ごとに特徴的にみられる絵画土器を、時期と描かれた題材とに視点を置いて眺めてきたが、その変化をまとめると、次のようなことがいえよう。

### (1) 中期段階（分布図1参照）

- (a) 弥生時代の絵画土器が畿内を中心に誕生し、主として西日本へ広がる。これらは、豊穰や生活の安定を願って製作され、中にはムラの祭りでの使用を目的としたものもあった。
- (b) 東日本では、縄文的な風習を残存させていて、土偶形容器から人面付土器へと変化しながらも福島から愛知にかけて盛行した。これらは、呪術的な目的をもたせ、供献・副葬ないし蔵骨的な使用方法がとられた。

### (2) 後期～古墳前期段階（分布図2参照）

- (a) 畿内では絵画がほとんどなくなり、記号土器が多くなる。古墳時代へ入ると器台形などの埴輪への文様が多様化するが、土器への線刻はまったくなくなる。

記号土器は、航行の安全を願って描かれたといわれる竜の絵を含めて、ほとんどが長頸壺ないし広口壺に描かれていて、水の確保など、水との関わりを想像させており、極めて限られた

使用があったと思われる。この時期には畿内とその周辺では土器による豊穡・生活の安定への祈りはなくなっていったようである。

(b) 地方では、絵画土器がなお残存し、豊穡への祈りに土器を用い続けるが、瀬戸内地方や東海地方では、特殊な弧帯文や人面文が描かれた土器が注目される。国家誕生への過程で大きな動きを示したとみられる吉備・尾張という地域を核に、葬送儀礼で使用されたと思われる土器や土製品に特異な絵画や文様が描かれていたのである。伝統的な葬送の風習を維持ないし固持しつつ畿内との関係を牽制していた様子が伺える。

西日本を中心に銅鐸絵画に触発されて描かれた農耕祭祀や生活への祈りを示す絵画土器は、国家統一への動きの中で歴史の上から消えていったが、その過程で、東と西に特徴ある絵画をみせていた。やがて東日本へ抽象的な弧帯文（直弧文）として残存・継承させるが、それも古墳前期のうちに消滅の道をたどっていった。クニの誕生に伴い集団祭祀が様々な表現の自由さを封鎖していった過程なのであろう。

- 注1. 福田友之「縄文絵画」青森県立郷土館だより18-4 1988  
土器への線刻は、岩手県釜石市館遺跡で縄文中期土器片に銚の刺った魚が、また、青森県八戸市葦窪遺跡では隆起線貼付による罫罫図の描かれた縄文後期深鉢がある。
- 注2. 拙著「原始・古代の土器・陶器にみる絵画文」『特別展・日本陶磁絵巻—やきものに刻まれた絵画—』愛知県陶磁資料館・五島美術館 1988
- 注3. 小林行雄「弥生式土器に描かれた原始絵画」『美術史』No15・16 合併号 美術史学会 1955
- 注4. 宮崎県～神奈川県の出土資料紹介『考古学雑誌』66-1, 67-1 1980, 1981
- 注5. 佐原真「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』66-1 1980
- 注6. 松尾信裕「大阪市内出土の絵画土器」『葦火』4 大阪市文化財協会 1986
- 注7. 朝日遺跡の場合は、弥生後期の壺形土器に同様の記号的な人物が描かれている。こちらは、焼成前に陰刻されていて、刷毛目の上にするどいタッチの線が明瞭である。
- 注8. 『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会 1972（報文中の第14図3）
- 注9. 佐々木謙「鳥取県淀江町出土弥生式土器の原始絵画」『考古学雑誌』67-1 1981
- 注10. 『特別展 弥生人のメッセージ 絵画と記号』図録P20 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986
- 注11. 注10 文献 P31の1
- 注12. 工楽善通『弥生土器』日本の原始美術3 講談社 1979
- 注13. 注12文献および金関愨「弥生人の精神生活」『古代史発掘』4 講談社 1975
- 注14. 出宮徳尚「甕を祭った遺跡」『月刊文化財』4 文化庁編 第一法規 1979
- 注15. 前掲（注2）『日本陶磁絵巻』図録 1988  
図録No32, No12, 13, No122, No110
- 注16. 同上図録 No160. 弧帯文で飾られているが、その主要な部分が人面文のようで、眼、まゆ、顔の輪郭線がみられる。
- 注17. 同上図録 No21
- 注18. 著名な香川県善通寺市仙遊遺跡出土の箱式石棺の蓋石に刻まれた人面文は安城市亀塚遺跡出土の人面文土器と酷似するが口ひげ、耳飾りが無い。しかし、岡山以外の瀬戸内地方にこの人面文が分布していたことを示す例である。（『特別展 弥生人のメッセージ 絵画と記号』図録P17 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986）



分布図 1.

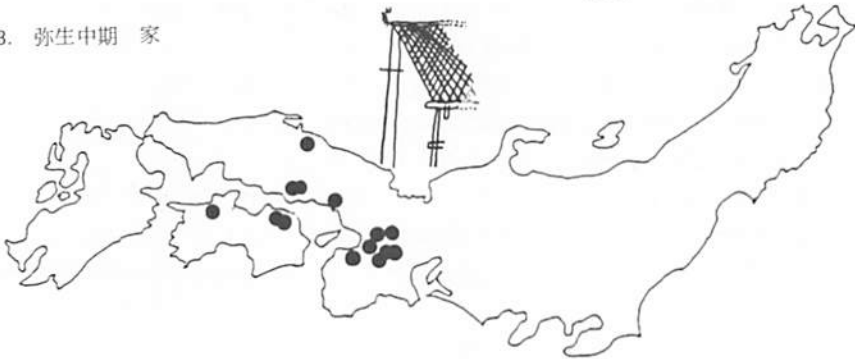
1. 弥生中期 絵画のある銅鐸出土地



2. 弥生中期 鹿



3. 弥生中期 家



4. 弥生中期 人物



分布図 2.

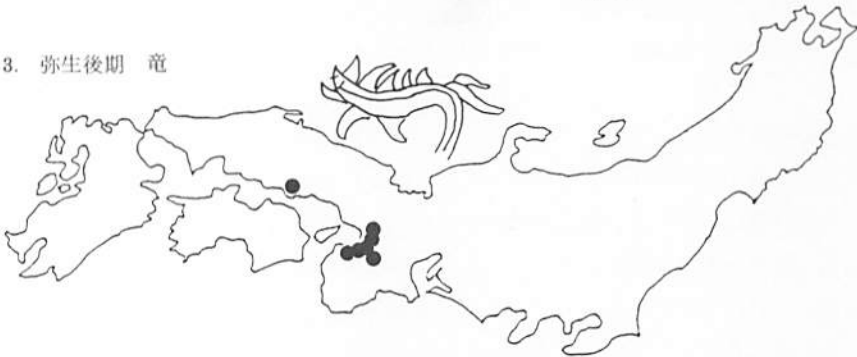
1. 弥生中期 土偶形容器と人面付土器出土地



2. 弥生後期 鹿・人物・鳥



3. 弥生後期 竜



4. 弥生後期～古墳前期 人面文土器

